

シベール氏薔薇色秕糠疹ニ就テ

Über die Pityriasis rosea Gibert.

金澤醫學專門學校皮膚科教室(主任土肥博士)

布施宗一(大正二)

本症ハ久シキ以前ヨリ佛國ニ知ラレ一八六〇年シベール氏 Gibert ニヨリテ薔薇色秕糠疹 Pityriasis rosea トシテ記載セラレ、本症ガ寄生性皮膚病的性質ヲ有スルヲ以テ獨逸ニ於テハ殊ニヘブラ氏 Hebra ノ如キハ斑狀斷髮性疱疹 Herpes tonsurans maculosus ト稱シ、白癬ノ部類ニ加ヘ、カボジ氏 Kaposi モ亦其說ニ贊同セリ。本症ハ元來甚ダ稀有ナルモノニ非ズ。歐米ノ文献ヲ徴スレバウンナ、ジァケュー、タンドレール、レウエンバッハ、ヤーリッシユ、オッペンハイム、ヂュホア、ブロック、ホルマン、ナイセル、ツァボキー、ブエルネル、リットル、Uma, Jaquet, Tandler, Löwenbach, Jartsch, Oppenheim, du Bois, Brocq, Hollmann, Neisser, Szabóky, Vöner, Little 氏等ノ記載スル所ヲ見ルモ、我國ニ於ケル記載ハ極メテ少ナク僅ニ二三ニ過ギズ、然レドモ其實驗例ハ決シテ少ナカラズ。例之東京醫科大學皮膚科ニ於ケル明治三十二年ヨリ同三十九年ニ至ル十年間ノ外來患者ニシテ統計ニ供セラレシ總數二萬二千五百四十四人中本症例五十五人(〇・二四三%)ヲ有シ、又九州醫科大學皮膚科ニ於テハ明治三十九年ヨリ大正四年ニ至ル十年間外來患者總數三萬一千人中九十三人(〇・三〇〇%)ノ本症例アリ。我が金澤病院皮膚科ニアリテハ大正二年ヨリ大正六年七月ニ至ル四年半ノ外來患者總數九千九百七十人中本患者十三人(〇・二二〇%)アリタリ。而シテ予ハ最近本症ノ病原ニ對シ興味アル症例ヲ實驗セルヲ以テ他ノ十二例ヲ合セテ本誌ニ報告スルコト、セリ。

今吾輩ノ實驗例ヲ記載スルニ先チ本症ノ症候ヲ概說スレバ、發疹ハ軀幹、頸部、上肢、上腿等ニ於テ米粒大、瓜核大、柿核大乃至小判大ノ圓形又ハ橢圓形時トシテ稍々不正形ヲ呈シ、淡紅色稍々褐色ノ色調ヲ有スル斑ヲ生ジ、間々

丘疹ヲ混ジ、時トシテ健康皮膚面ヨリ隆起スル事蕁麻疹ニ於ケルガ如キモノアリ (Vohrer)。斑ノ周圍ハ細カキ鋸齒狀ヲ成シ、中心ハ著色較淡ウシテ黃褐色ヲ帶ビ、且ツ中心ニ枇糠様ノ落屑アリ。本症ノ初メハ數個散在スルニ過ギザレドモ數日ニシテ急ニ原發部位ニ隣接セル諸處ニ發生シ、甚ダシキハ顔面及ビ手足ヲ除クノ外殆ド全身ヲ侵スニ至ル、殊ニ好シテ軀幹及四肢ノ屈側ニ發生ス。

本症ハ適當ノ治療ヲ加フルトキハ二三週間ニシテ治スベク、其際病勢ノ減退ト共ニ發疹漸ク褪色シ、時トシテ五六週ノ後自然ニ治癒スルコトナキニ非ザルモ放置スレバ概ネ月ヲ經ルモ治セズ、紅斑ノ基底ニ浸潤ヲ呈シ癢痒劇甚ナルコトアリ、治後ハ輕度ノ色素ノ沈着ヲ殘ス事アリ。自覺症トシテ主ナルモノハ癢痒ナレドモ強烈ナラズ、輕度ナル場合多ク時トシテ癢痒ヲ缺ク事アリ。本症ハ常ニ急性ニ發スルモノニシテ慢性ノ形ヲトルモノ殆ド無シ、チビエルヂュ氏 [Thibierge] ハ甚ダ稀有ノモノナリトシテ慢性ノ形ヲトリタル一例ヲ報ジタリ。尙ホ全身ニ汎發セザル以前即八乃至十日
前ニ軀幹或ハ頸部ニ屢々孤立セル圓形或ハ橢圓形ノ斑ヲ原發スル事アリ之レヲブロック氏ハ原發紅斑 Plaque primitiveト稱シタリ。

症 例

嘗テ内藤氏ガ本症ト白癬 Trichophytieト合併セル一例ヲ報告スル處アリシガ、予モ亦同一合併症ヲ實驗シタルヲ以テ前症例ヲ除キ十二例ト共ニ各例ノ類似的記載ヲ避ケ表トシテ一括スベシ。

| 番號 | 患 者 | 年 齡 | 職 業 | 初 診 | 現 病 歷 | 合 併 症 |
|----|-------|-----|-----|------------|--------------------------|-----------------------|
| 1 | 高橋 某男 | 二三 | 學生 | 大正四年七月二十六日 | 一週間前ヨリ軀幹ニ輕度ノ癢痒アル皮疹ヲ發ス。 | ナシ。 |
| 2 | 吉川 某女 | 一五 | 學女 | 同 年十月十一日 | 皮疹ヲ發ス。全身ニ輕度ノ癢痒アル皮疹ヲ發ス。 | 左大腿外側ニ白癬ヲ有ス。 |
| 3 | 玉瀬 某男 | 二一 | 米商 | 同 年十月二十五日 | 約一ヶ月前ヨリ胸部四肢ニ輕度ノ癢痒性皮疹ヲ發ス。 | 潜伏第二期微毒、ワツセルマン氏反應強陽性。 |
| 4 | 坪田 某女 | 二一 | 無 | 大正五年二月 四日 | 五六日前ヨリ胸、腹、背部ニ癢痒性皮疹。 | 十日前下腹部ニ白癬ヲ發ス |

| | | | | | | | |
|---|-------|--------|-----------|-------|---------|--------|-------|
| 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 |
| 中村 某男 | 村田 某男 | 沖田 某男 | 崎田 某女 | 岡田 某女 | 吉田 某女 | 大門 某女 | 兒玉 某男 |
| 三〇 | 二三 | 二三 | 二三 | 三七 | 二七 | 六〇 | 五六 |
| 箱商 | 教員 | 學生 | 藝妓 | 無 | 女教員 | 船商 | 藍商 |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 年七月二十八日 | 年六月四日 | 年四月十九日 | 大正六年一月十八日 | 年十月三日 | 年五月二十五日 | 年九月十二日 | 年四月七日 |
| 三ヶ月前ヨリ全身ニ癩痒性皮膚疹。 十五日前ヨリ下腿、腰、頭部及兩前膊ニ割シカラザル癩痒性皮膚疹。 十五日前ヨリ胸部、腹部ニ癩痒性皮膚疹。 四五日前ヨリ全身ニ播種狀癩痒性皮膚疹。 約一ヶ月前ヨリ頭部ニ癩痒アル皮膚疹突發シ漸次胸、背、上肢及大腿部等ニ蔓延ス。 二週間前ヨリ上膊及胸部ニ癩痒アル皮膚疹散發ス。 本表外ニ記載ス。 二週間前背部ニ癩痒アル皮膚疹ヲ發セシガ四五日前ヨリ俄然全身ニ擴ル。 | | | | | | | |
| 全身性急性濕疹。 動脈硬化症。 ナシ。 ナシ。 ナシ。 ナシ。 潜伏第二期微毒、右大腿内側ニ白癩ヲ有ス。 ナシ。 | | | | | | | |

右症例第十一例村田某男ニ對スル病歴ニ就テハ稍々詳細ナル記載ヲ有スルヲ以テ、前記症候ニ於ケル記載ト重複スル点アルモ顧ズ予ノ報告ノ主眼ナルヲ以テ必要ト認メ記載スルコト、セリ。

即十四日前ヨリ右内股部ニ初メ米粒大、赤色、皮膚面ヨリ僅ニ隆起、輕度ノ癩痒アル皮膚疹ヲ發シ、漸次増大、疹ノ周圍ニハ小水泡ヲ有シ、中央稍々褐色ヲ呈スルニ至リ、健康皮膚トハ全ク明ニ境界セラル。然ルニ五六日前ヨリ右大腿内部ニ麻實大、淡赤色或ハ稍々褐色ノ皮膚面ヨリハ僅ニ隆起セル時トシテ癩痒ヲ感ジ時トシテ感ゼザル皮膚疹數個散發セシガ、漸次胸腹部及上肢ニ蔓延セリ。増大セルモノニアリテハ圓形、橢圓形、不正形ニシテ皮膚面ヨリ僅ニ隆起シ中央ニ小落屑ヲ有シ、周圍ニ小水泡ヲ有スル如キモノアリ、何レモ健康皮膚トハ明瞭ニ境界ヲナシ、硝子板ニテ壓抵スレバ褪色シ弱褐色ヲ呈ス。合併症トシテ第二期潜伏微毒ヲ有シ、ワッセルマン氏反應強陽性ニシテ、昨年來當皮膚科ニ於テ「サルバルサン」四回楊汞二十六回ノ注射ヲナシ目下尙驅微治療中ノモノナリ。本症例ニヨレバ約十五日前ニ右内股部ニ發生シタリト云フ皮膚疹ハ明カニ寄生性疱疹 Herpes tonsurans vesiculosus ニシテ五六日前ヨリ汎發セリト稱スル皮膚疹ハ蕒薇色枇糠疹 Pityriasis rosea (Gibert) ナルハ臨床上明瞭ナリ。

組織的變化

予ハ患者ヨリ標本ヲ採取セザリシヲ以テ解剖的所見ニ關シテハ唯諸家ノ實驗セル所ヲ列舉スルノミ。ジ^アケ^エ、ウ^ンナ、タン^ドレル氏等ノ研究セル所ヲ綜合スレバ次ノ如シ。即チ皮膚ノ角質層ニハ著シキ變化ナク、棘狀細胞層及種子層ニハ肥厚ヲ見、多數ノ核分裂ヲ示シ、上皮細胞ノ膨大セルヲ見ル、尙棘狀細胞ニハ浮腫ヲ呈シ、圓形細胞ノ輕度ノ浸潤アリ、古キ疹ノ中央ニ位シ落屑ニ一致セル所ニハ著明ナル不全角化ヲ見、乳頭體及真皮ニハ炎症ヲ呈シ、血管ノ擴張及血管周圍ノ圓形細胞ノ浸潤及浮腫アリト稱シ。ホ^ール^マン氏ハ前諸家ノ實驗ト一致スル所アルモ稍々細密ナル觀察ヲナシタリ。氏ノ所見ニヨレバ新鮮ナル發疹ニアリテハ病變一般ニ弱ク、真皮表層ノ血管周圍ニ稍々強度ノ細胞浸潤ヲ見、同時ニ浮腫モノノ部位ニ限局セラル、ヲ見ル、表皮ニ於テハ病的變化僅微ニシテ棘狀層ニ於ケル増殖ハ強度ナラズ、又上皮層ノ下層ニ於ケル細胞ハ浮腫狀ヲ呈シ且輕度ノ圓形細胞ノ浸潤アリ、顆粒層ハ初期ニハ侵サレズ、角質層ハ輕度ノ落屑アルノミ。稍々古キ疹ニアリテハ上記ノ所見ニ比シ高度ナルヲ見、殊ニ圓形細胞ノ浸潤及上皮層ノ浮腫益々著明ニシテ爲メニ細胞ノ形態ニ變化ヲ及ボシ、又小水疱ヲ形成シ海綿樣ヲ呈ス。ウ^ンナ氏ノ云フガ如ク濕疹ニ於ケル濕潤セル形狀ト同様ナル觀アリ而シテ小水疱内容ハ血清及海綿樣ニ變質セル 上皮細胞ヨリ成ル。レ^ウエ^ンバ^ッハ氏ハ蔷薇色皰糠疹ト斑狀斷髮性疱疹トヲ病理解剖上區別シテ前者ニアリテハ上皮ニ於テ中等度ノ不全角化、棘狀細胞増殖、輕度ノ細胞間空隙ノ擴大及圓形細胞ノ浸潤ヲ呈ス、然ルニ真皮ノ上層ニ於テハ乳頭體及乳頭下ニ強キ浸潤ヲ示シ、深部ニ向ツテ明ニ境界セラル、ヲ見ル。後者ニアリテハ前疹ニ反シテ表皮ニ變化強クシテ真皮ニ於テハ變化弱シト云フ。

前數氏ノ本症ニ對スル病變ヲ約言スレバ角質層ノ剝離、角質層下ノ棘狀細胞層ニ於ケル小水疱形成、棘狀層ノ肥厚及分核像、上皮細胞間ノ強度ノ浮腫、真皮ニ於ケル圓形細胞ノ浸潤、血管周圍ノ浸潤等ナリ。

病 原

本症ノ最モ吾人ニ興味ヲ與フル点ハソノ病原尙不明ニ屬シ、而モ本症ガ白癬ニ類スル寄生性皮膚疾患ノ性質ヲ有スルニアリ。隨テ甲ハ本疹ヨリ一種ノ絲狀菌ヲ實見セリト云ヒ、乙ハ又之レヲ反駁シ、丙ハ本症ヲ目シテ全身病ノ一分症又ハ消化器障害ノ結果ナリト論ジ、時トシテ微毒ト合併スル事アルヲ以テ微毒ニ一種ノ疑問ヲ有スル者アリ。予ハ何レガ正鵠ヲ得タル論ナルカ断定スルヲ得ズト雖モ、二例ノ患者ニ白癬ヲ合併シ、而カモ第十一例ニ於ケル村田某男ノ如キハ先ヅ内股部ニ白癬ヲ生ジ次デ數日ニシテ全身ニ本症ガ散在性ニ發疹セリ由是觀之第十一例ノ如キハ白癬トノ原因的關係ヲ立證スルニ極メテ有力ナル症例ナリト信ズ。今本症ノ原因論ニ對シ諸家ノ說ヲ擧グレバ次ノ如シ。

オッペンハイム氏ハ角質層ノ新鮮ナル鱗屑中ヨリ多數ノ橢圓形或ハ四角形ノ光線屈曲性アル無核芽胞ヲ發見セリト稱シ、デホア氏モ亦「ピルツ」ヲ證明セリト云ヒ、コヴィサ氏 *Covisa* ハ「ミクロスポロン、ヂスバル」 *Mikrosporon dispar* ニ類似セル寄生物ヲ鱗屑ノ中ヨリ證明シ得ルモ培養試驗ニ於テ不結果ニ終リタリト云ヒ、ギルクリスト氏 *Gilchrist* ハ一患者ノ鱗屑中ヨリ「ミクロスポロン、ミスチシムム」 *Mikrosporon minutissimum* ニ類スル「ピルツ」ヲ發見セリト云フ。

ナイセル、ヤダッソン、ブロック氏等ハ寄生性皮膚病ノ傾向ヲ有スルモノナリト稱スレドモ未ダ原因菌ノ證明ヲ見ザリキ。リットル氏ハ最近十一年間ニ本症百七十四例ヲ實驗シタレドモデホア氏ノ發見セリト稱スル小體ヲ認ムル事ヲ得ズト云ヒ、ホワイトフィールド氏 *Whitfield* モ亦デホア氏ノ說ニ反對シ、アダムソン氏 *Adamsou* ハ本症ヲ鱗屑疹或ハ脂漏性濕疹ト同様ニ見做シム微體ヲ搜索セルモ無効ニ終リタリ。ツァボキー氏ハ百十九例ノ患者ニ就キ檢索セル結果毫モ寄生性及接觸傳染性ノ性質ナキモノニシテ全ク消化障害ニヨリテ惹起セラル、モノナリト結論セリ。レドナー氏 *Redner* ハ再發スルヤ否ヤ明ナラズト稱シ。ペーネット氏 *Pernet* ハ本症ノ再發及傳染ヲ見タル事ナシト云ヒ、ロバーツ氏 *Roberts* ハ本症ヲ目シテ所謂中毒性紅斑ニ類スルモノトセリ。オウエンス氏 *Owens* ハ三十例ノ本病患者ニ就キ詳細ナル觀察ヲナシタルニ扁桃腺炎九例、上氣道ニ急性炎ヲ有スルモノ三例、胃腸障害ヲ有スルモノハ一例モナク、患者ヨリ採血シワッセルマン氏反應ヲ試タルモ陰性、暗視野裝置ニヨリテ鏡檢シタルモ陰性、接觸試驗モ陰性、「サル

バルサン」ニテノ治療的試験モ亦不結果ニ終リ何レニセヨ「ピルツ」ラシキモノヲ證明スルヲ得ザリキト。アルダーツン氏 Alderson ハ鱗屑ヲ「エーテル」ニテ洗ヒ次デ一〇%加里鹵汁ニテ處置シテ鏡檢シタルモ更ニ「ピルツ」ラシキモノヲ證明シ得ザルヲ以テハイデ氏 Hyde ト共ニ神經系統ノ障害即チ神經過勞、身體的過勞等ガ原因ナラント思考セリ。本症ハ卑濕ノ住家内ニ於テ家族中ニ蔓延スル事アリ、或ハ久シク箆筒底裡ニアリテ黴臭ヲ帶ビタル古襦袢、擊劍柔道用ノ汗ジミタル下着、旅館ノ古寢衣ノ類ヲ其儘着用シ或ハ生乾キノ手拭ヲ以テ身體ヲ摩擦スル後ニ於テ發生スルコト往々之アリ、是等ノ故ヲ以テ土肥(慶)氏ハ本症ヲ一種ノ絲狀菌性皮膚病ニ加フル所因トセリ。シテルベル氏 Scherber ハ多汗後ニ發生スルコト多シト云ヒ、ハーツエン氏 Hagen ハ本症ヲ有スル患者ノ六〇%ニ扁桃腺炎又ハ咽頭炎ヲ證明シタリト云ヒ。ギルクリスト氏ハ本病者ノ十二例ハ黴毒患者ナリシヲ報ジ。オームスバイ氏 Ormsby ハ緩和ナル殺菌的軟膏療法ニヨリテ能ク治癒セシメ得ルヨリ考フルモ寄生性ノ性質ヲ有スルモノニシテ、氏ノ實驗ニヨレバ内服ニハ少シモ作用セズト云フ。予ハ「ツエロイデン」法ニヨリテ鱗屑ヲ採取シ染色標本ヲ造リ或ハ二%苛性加里溶液ニテ處置シ精細ニ鏡檢スル處アリシモ培養試験ト共ニ何等得ル所ナカリキ。要之本症ノ原因ニ對シ諸家ノ説ノ有力ニ一致スル点ハ寄生性ノ性質ヲ有スル皮疹ニシテ未ダ是認スベキ原因菌ノ證明ナキ所ニアリ。

發生部位及年齡

本症ノ好發部位ハ軀幹ニシテ手、足、顔面ニ發生スルガ如キハ極メテ稀有ニシテ、恰モ癩風及紅色陰癬ニ於ケルガ如ク主トシテ日光ニ曝露セラレザル部位ニ發生スル事多シ。予ノ症例ニアリテハ總テ然リ、然レドモ手、足、顔面等ニ發生セル症例トシテハブエルネル、フオチノズ、シエルベル氏等ノ報告アリ我國ニアリテハ宮崎氏ハ同ジク顔面ニ發生シタルヲ報ズ、然レドモ氏等ノ報ズル處主トシテ高度ナル薔薇色糝糠疹ガ胸背部ヨリ該部ニ蔓延セルモノニシテ、予ノ涉獵セル文献ニアリテハ唯フオチノズ氏ノ一例ハ初メ顔面ニ限局セシガ漸次軀幹及四肢ニ蔓延シタリト報ズ。

年齡ニ關シテリットル氏ハ十歳乃至十五歳ノ間ニ多數ナリト云フモ、予ノ症例ニアリテハ青年壯年ノ時期ニ多數ヲ有

シ、之レヲ東京及九州ノ兩醫科大學皮膚科ノ統計ニヨレバ十六歳ヨリ三十五歳迄ノ間ニ最モ多數ヲ有セリ、此点ニアリテハ予ノ症例ト一致スル處アリ。バルネギアン氏 Paronaginian ハ八箇月ノ女兒ニ發生セルヲ報ジタリシガ、斯ノ如キ例ハ東京大學明治三十九年統計ニ於テ一男兒アリタルノミ。

本疹發生ノ季節ニ關シテハオウエンス氏ハ秋季即チ九月十一月ノ間ニ多シト云ヒ、リットル氏ニヨレバ七月ヨリ十二月ノ間ニ多シト云フ、予ノ症例ト比較スレバ季節ニ於テリットル氏ト一致スルヲ見ル。

本症ハ職業ニハ關セザルモノ、如シ。男女ヲ比較スルニ予ノ症例ニアリテハ男女ニ對シテハ何等關スル處ナキモノノ如ケレドモ東京大學及九州大學ノ統計ノ示ス處ニヨレバ男子ノ罹病者ハ女子ノソレニ比シテ二倍ノ多數ヲ有スルヲ見ル。

鑑別診斷

本症ハ再三反覆論述セル如ク白癬ニ類シ黴毒疹ノ如キ状態ヲ呈スルニヨリ是等ト混同セラル、場合少ナカラズト信ズ。本症ト鑑別ヲ要スル皮膚病トシテハ1. 黴毒性蓄薇疹 *Roseola syphilitica* 本疹ニアリテハ瘙痒ナク又鱗屑ナク發疹ノ色ハ蓄薇色秕糠疹ニ比シ不明瞭ナリ故ニ本邦人ニアリテハ不注意ニヨリテ見逃サル場合アリ。2. 中毒性紅斑 *toxische Erythem* 殊ニ「バルサム」性蓄薇疹 *Roseola balsamica* ニ於テハ鮮紅色ニシテ銳利ニ健康皮膚トハ境界セラレ鱗屑ヲ有セズ。3. 小水泡性白癬 *Trichophytia tonsurans vesiculosa* ハ圓形ニシテ邊緣少シク隆起シ數々虹彩狀ノ重圈ヲ呈シ。4. 癬風 *Phytiriasis versicolor* ハ灰白色圓形ニシテ瘙痒ヲ缺キ搔破スレバ落屑アリ之レヲ檢スレバ「ミクロスポーロン」ハ「フル」ヲ證明シ得。5. 脂漏性濕疹 *Eczema seborrhoicum* ニアリテハ同時ニ濕潤面又ハ痂皮面ヲ認ムベシ且ツ多クハ頭部ヨリ始マリ下行スベシ。6. 乾癬 *Psoriasis vulgaris* ハ限局セル發疹、銀白色ノ鱗屑ヲ帶ビ之レヲ剝離スレバ点狀出血ヲ見、伸側殊ニ肘及膝蓋ニ好發シ、瘙痒ヲ缺キ或ハ僅ニ存ス。

療法

本症ハ療法ニヨリ容易ニ治癒シ得ルモ、時々長時日ヲ要スルコトアリ。諸家ハ本症ニ對スル特效藥ナルモノヲ指摘セザルモ、奏効セル藥劑トシテハーデング氏 Harding ハ硫黃浴、サヴィル氏 Savill ハ過滿俺酸加里浴及緩和ナル水銀劑軟膏ヲ賞用シ、ヨセフ氏 Joseph ハ膠樣硫黃 colloidaler Schwefel ノ振盪合劑ヲ賞用シ、チャーエス氏 Chajes ハ石炭「テール」ノ新製劑タル「プーリウム」Parium ヲ以テ奏効セルヲ報ズ。我金澤病院皮膚科ニ於テ奏効アリト認メタルハウキルソン氏軟膏、土肥氏「ラノリン」膏、五・〇%「レゾルチン」亞鉛華軟膏ニ「ツメノール」、「チゲノール」、「チオノール」、「ピチロール」等ヲ配合セルモノ或ハカポジイ氏軟膏(二・〇%)、土肥氏麥硫膏等ナリトス。予ノ實驗セル第十一例ノ如キハ麥硫膏ヲ塗擦スルコト僅ニ數日ニシテ全癒セシメ得タリ、斯ノ如ク時ニ卓効ヲ奏スルコトアリ。之レヲ要スルニ治療上注意スベキハ本症ハ刺戟サレ易ク、軟膏使用後著シク増悪スルコトアリ、故ニ作用強キ軟膏ハ應用セザルヲ可トス。其他一般寄生性皮膚病ニ對スルガ如ク襯衣ノ洗濯、日光消毒等ヲ行フベシ。

恩師土肥教授ノ懇篤ナル御指導ニ對シテハ衷心ヨリ感謝ノ意ヲ表ス。

Literatur.

- 1) **Alderson**, Pityriasis rosea, klinische Beobachtung. The journal of cutaneous diseases including syphilis. 1914. (Ref. Dermat. W. Nr. 27. 1914.)
- 2) **Hollmann**, Zur Histopathologie der Pityriasis rosea. Archiv f. Dermat. u. Syph. Bd. LI. 1900.
- 3) **Jarisch**, Pityriasis rosea. Hautkrankheiten. 1908.
- 4) **Joseph**, Pityriasis rosea. Lehrbuch der Hautkrankheiten. 1914.
- 5) **Little**, Discussion über Pityriasis rosea. Proceeding of the royal society of medicine, dermat section. (Ref. Dermat. W. Nr. 24. 1914.)
- 6) **Owens**, Beobachtungen über Pityriasis rosea. The journal of cutaneous diseases including syphilis. 1914. (Ref. Dermat. W. Nr. 27. 1914.)
- 7) **Plotinos, G.**, Über einen seltenen Fall von Pityriasis rosea. Dermat. Zeitschrift. 1906. Bd. 13. (Ref. Jahresbericht f. Dermat. I.)
- 8) **Riecke**, Pityriasis rosea, Lehrbuch der Haut- u. Geschlechtskr. 1914.
- 9) **Szabóky, J.**, Beiträge zur Ätiologie der Pityriasis rosea. Monatsh. f. prakt. Dermat. 1906. 42. (Ref. Jahresbericht f. Dermat. I.)
- 10) **Tandler**, Über Pityriasis rosea. Archiv f. Dermat. u. Syph. Bd. XXXVII. 1896.
- 11) **Unna**, Pityriasis rosea. Histopathologie der Hautkrh. 1894.
- 12) **Vörner**, Pityriasis rosea urtica. Archiv f. Dermat. u. Syph. 1897. Bd. LXXXIII.
- 13) **Real-encyclopädie der gesamten Heilkunde**. 4. Aufl. 1911.
- 14) **栗田章司**, 東大皮膚科外來患者統計. 皮膚科及泌尿器科雜誌. 第三卷.
- 15) **西川生太郎**, 齊藤義雄, 同上. 第七卷.
- 16) **土肥慶藏**, 同上. 第十卷.
- 17) **淺田恒二**, **大森守**, **吉村榮太郎**, **栗崎道隆**, 九大皮膚科外來患者統計. 我教室ノ新築ト七年. 18) **關川敬治**, **原信彦**, **荒本熊雄**, **納富保廣**, 占部次七, 同上. 開講十週年誌.
- 19) **宮崎鐵**, 薺藏色粧雜誌ノ一例. 皮膚科及泌尿器科雜誌. 第九卷.
- 20) **土肥慶藏**, 皮膚科學. 下卷.